

2018年2月4日

「わたしのパンを食べている者がわたしに逆らった。」 ヨハネ 13:18

弟子たちの足を洗ってから、主イエスは彼らに、これからのことを話し、何が起こっても大丈夫なようにされます。

一つのは、彼らがやがて教会の指導者になった時の心得です。主が示してくださった模範にならって、「あなたがたも互いに足を洗い合う」べきです（→ルカ 22:26 「仕える者のように」）。

もう一つは、ユダが裏切ること（→6:70）ですが、主は「どのような人々を選び出したか分かっている」と言われます。「この『分かっている』は、本来、神に属することである。」（カルヴァン）神の御子は、ダビデと同じように、大切に育てた弟子が「わたしにむかってそのかかとをあげた」（詩 41:10 口語訳）という場面に直面されますが、「わたしは（神で）ある」故に、大丈夫です。

主は「心を騒がせ」ながらも、「あなたがたのうちの一人がわたしを裏切ろうとしている」と言い渡されます。「イエスの愛しておられた者」（使徒ヨハネ）にペトロが合図して、「だれのことですか」と尋ねさせ、主は「パン切れを…ユダにお与えに」なります。主は、迷うことなく、救い主として前進されます。

「飼い犬に手をかまれる」ような思いをしながらも、主は弟子たちのことを心配されます。「我がため悩みを忍びたまひし…み神の小羊」（讃 257 番）です。

2018年2月11日

「あなたがたに新しい掟を与える。互いに愛し合いなさい。」 ヨハネ 13:34

ユダが去った後、主イエスは残った11人の弟子に、彼らだけになっても絶望せず、心を一つにせよ、と教えられます。

ユダの裏切りが決定的になった時、主は「人の子は栄光を受けた…神も…栄光をお与えになる」と、十字架と復活と世界宣教の開始を宣言し（→12:24 「一粒の麦」）、弟子たちを励まされます。

主は、「子たちよ…あなたがたはわたしを捜すだろう」と、これからのことを言い、「新しい掟」を示されます。「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい」と命じられます。「敵を愛しなさい」（マタイ 5:44）と比べると、レベルが低いようですが、「友愛の絆が弟子たちの間ではるかに固く、より緊密に結ばれているのは当然」（カルヴァン）です。そうすることで、「あなたがたがわたしの弟子であること」を証しします（福山教会！）。

ペトロは、「主よ、どこへ行かれるのですか」（クオ・ヴァディス？）と尋ねて、主から「あなたは三度わたしを知らないと言う」と予告されます。「今はついて来ることはできないが、あとでついて来る」と言われます（→21:19）。

旧約時代にも「愛の掟」（レビ 19:18）はありましたが、主は愛のサンプルとなられたので（→13:1）、「主よ、み手もて」（讃 285 番）と従うのです。

2018年2月18日

「あなたがたのために場所を用意しに行くといったであろうか。」 ヨハネ 14: 2

14章から16章までは「別れの説教」と呼ばれ、主イエスは弟子たちを安心させ、希望を持たせようとされます。

主は、不安な彼らに、「心を騒がせるな」(→13: 21)と言い、「神を信じ…わたしを信じなさい」と勧められます。「私たちの信仰は、ただキリストだけに向けられるべきである。」(カルヴァン)「わたしの父の家(天国)には住む所がたくさんある…その道をあなたがたは知っている」と言われま(葬儀!)

トマス(→20: 24)は、「その道」を具体的に知ろうとしますが、主は「わたしは(真理と命の道)だと言い、「わたしを知っているなら、わたしの父(なる神)おも知る」のだから、安心しなさいと言われます(そっくりな親子!)

フィリポ(→12: 22)は、他の弟子たちを執り成すように、「御父(なる神)をお示してください」と言いますが、主は「わたしを見たものは、父を見たのだ」と同じ答えをされます。そして、「はっきり言っておく」と念を押して、これから弟子たちは「もっと大きな業を行う」と予告され、「わたしの名によって願うことは、何でもかなえてあげよう」とも約束されます(福山教会の将来!)

主は天に帰られますが、そこに住む所を備えてくださり、地上に残る私たちは「安かれ」(讃 298番)と歌うのです。

2018年2月25日

「わたしは、あなたがたをみなしごにはしておかない。」 ヨハネ 14: 18

心細くなっている弟子たちに対して、主イエスは、ご自分が決して彼らを放っておかない真の友だ、と言われます。

別れに際して主の願いは、「わたしを愛しているならば、わたしの掟を守る」ことです(恩師の教え!)

そのために主は「別の弁護者」として「真理の霊」を遣わし、「この霊があなたがたと共におり…内にいる」ようにし、彼らに対して「わたし自身を現す」でしょう。

「イスカリオテでない方のユダ」(→マルコ 3: 18「タダイ」)が、「世にはそうならないのは、なぜでしょう」と質問します(他の人が気になる!)。主は、「わたしを愛する人は、わたしの言葉を守る」のだから、今はその人たちに語るのだ、と言われます(→21: 21「主よ、この人は?」と質問するペトロ)。

主は改めて聖霊について、「父がわたしの名によってお遣わしになる聖霊が…わたしが話したことをことごとく思い起こさせてくださる」と語られます(使徒ヨハネ自身にも!)。まもなく「世の支配者」(サタン)が来ますが、大丈夫です。主は「平和(シャローム)を…残し」て行かれます(→マタイ 28: 20)。

主は弟子たちを愛しておられ、彼らを「みなしご」(オルファノス)には決してされません。「慈しみ深き友なるイエス」(讃 312番)に祈ることが出来ます。